

## R I サブセンターの改修

富 永 健 (化学)

設置以来20余年を経て老朽化の目立ちはじめた理学部のR Iサブセンター本室がこのほど改修され、目下整備の進んでいる化学館・理4号館地区の中庭の風景に新たな彩りをそえることになった。まず、改修の実現のため御盡力いただいた学部長はじめ理学部事務部、本部事務局の関係者の方々に、理学部放射線管理委員会ならびにR I施設使用者に代って厚く御礼申し上げたい。こゝでは、今回の改修のあらましとともに、理学部のR Iサブセンターの沿革や現状についても簡単に紹介し、この機会に共同利用施設としてのサブセンターに対する一般の御理解を得たいと思う。

理学部のR Iサブセンター（正確には、理学部放射性同位元素研究室）は、昭和32年定められた放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律に則って、R I等の使用・管理の体制を整えるため本学に生れた最初の部局サブセンターで昭和36年春完成した。そして、昭和46年に理学部

2号館にサブセンターの分室が、また3号館にも分室が設けられ、2号館の分室はその後拡張されて現在に至っている。理学部にはこれら非密封R Iの使用施設のほかに、密封線源のみを用いる施設が1、4号館、化学館にある。理学部の建物がキャンパス各所に分散しているため、サブセンターを中心にこのように分室を設けて利用の便をはかっている。

R Iサブセンター本室は主として物理・化学系の研究者に利用され、また生物系の研究者も各分室で使用承認されていないR Iを用いる場合本室を利用している。今回の改修は、室内では床面張替・壁面補修塗装や、フード・流しなどの撤去・交換のほか、新たに汚染検査室を設置し、管理室に窓を設け、また数年来屋上に仮設していた地殻化学実験施設のプレハブ実験室を撤去して屋根や外壁の改修も行われ、周囲の赤れんがと同系の色に外装も一新された。さらに排水の貯留槽や排気



化学新館から望むサブセンター本室の全景

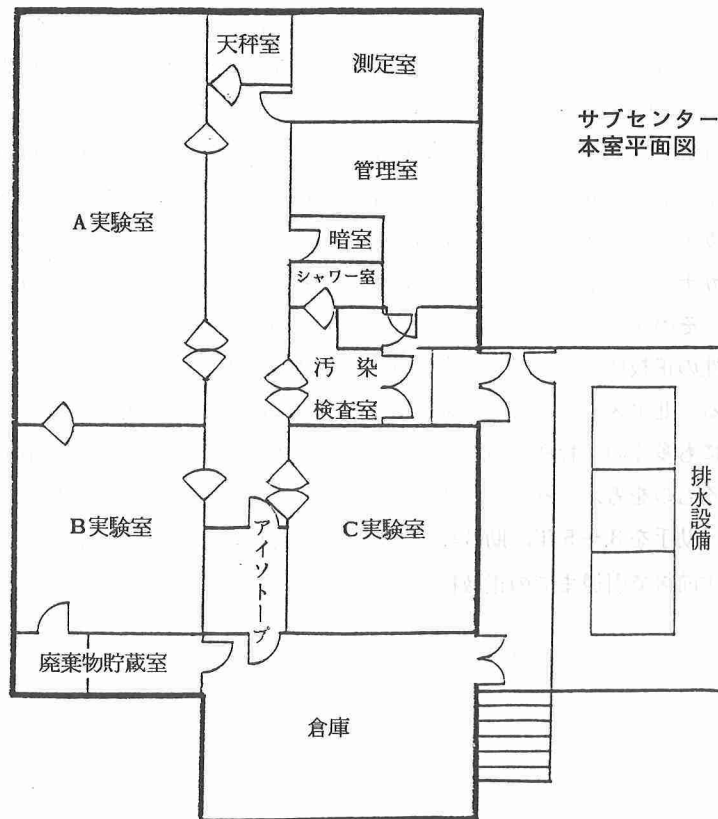
系についても補修が行われた。予算の関係でフードなどの設備や配線・配管までは更新できなかったが、当面「老朽化」のイメージを一掃し得たのは喜ばしいことである。

理学部の放射線管理体制は、学部長の下に放射線管理委員会があり、R I等の管理・使用・障害防止計画などの重要事項を審議し、放射線管理の実務は放射線管理室（助手1，技官1）が事務部と協力して担当している。放射線管理室はサブセンター本室に置かれていて、学部内のR Iの購入・使用・保管・廃棄や汚染検査・放射線測定などの定期的測定，記録等の検査・保存，緊急時・事故の際の連絡調整などR Iに関するさまざまな業務を行っている。理学部におけるR Iの購入件数は昨年度で260件に達し，この10年間にほぼ倍増している。また，理学部の放射線取扱者の数はX線を含めると約390名（約50研究室）にのぼるが，各取扱者は研究室の責任者，担当者を通じて管理

室と密に連絡している。

R Iサブセンターの運営費は，本室・分室をあわせて年間約530万円に達するが，このうち中央からのR I施設経費約100万円と理学部共通経費からの約120万円とでまかなわれるのは約40%に過ぎず，利用者の負担は60%に及んでいる（さらに予備費の補助を受けても利用者負担は40%をこえる）。これらの経費は，通常の研究費とは異なり，法令に従ってR Iを使用するため不可欠なものであり，利用者負担にも限度があると思われるので，運営費のやりくりは今後ますます頭の痛い問題である。厳しい財政事情の下ではあるがこの点については是非一層の御配慮をお願いしたいところである。

R Iサブセンターの今後の課題としては，このような運営費の問題とともに，新しく設置される遺伝子実験施設との関係や，理3号館分室の改修の実現がまずさしせまった問題であるが，長期的



には理学部の将来計画（建築計画）の中でサブセンター本室と分室が統合される形で新営されることが望ましいと思われる。化学新館5階のオフィ

スからサブセンター本室を見おろしながら、これらの課題に頭をかかえる毎日である。